



～道徳の授業に新しい風を～ 「人権×道徳」教育

元大阪教育大学教授 園田 雅春

指導の
ポイント!

おおかみは、なぜイジワルをするのか？



自分の方が相手より力がまさっていると見れば「こちら、もどれもどれ」と、強圧的なおおかみ。相手が先に橋の真ん中まで渡っているにも関わらず――。

これは定番教材「はしのうえのおおかみ」の最初の場面です。ここで、子どもから「このおおかみさん、どうしてこんなイジワルするの」という問いが発せられるような授業、学級集団をめざしたいものです。

この問いに対して、次のような意見が想定されます。「いつも、だれかにイジワルされているからじゃないかな」「友だちがいないから、さびしいのかも」「そうそう。友だちがほしいんだ、きっと」……。

子どもから「どうして」という問いが出そうにない場合は、授業者から投げかけてみるのも一案です。

なぜ、このおおかみはイジワルをするのか。その背景を見つめ、考えて、そこから他者理解、課題解決の途を多面的に探っていくこと。この視点をないがしろにするわけにはいきません。人権課題は構造的な関係性に着目しない限り、根本的な解決には至らないからです。

ところが、おおかみは幸いなことに、親切で思いやりのある「くま」と運命的な出会いをします。その体験を通して、まるで人が変わったように変容するのです。この場面から子どもたちは何をどう学ぶのでしょうか。



普段から本音が語れる「学級・集団」か？

多くの子どもたちは授業者の「ねらい」どおりに、親切心・思いやりの大切さを改めて胸に刻むことでしょう。ただ教室の空気に圧されて右へ倣え。これでは困ります。

そこで、機を見て子どもたちに次のような「変化球」を投げてみてはどうでしょう。（もちろん、子どもの間から同様の問いが発せられることを願います）



意見は分かれると思われます。あえて「ゆさぶり発問」を投じたのですから。考え抜いた末、正直に「自分はムリ。だって、急にやさしくなるって、何かはずかしいもん」と、本心を語り出す子どもが出てくるかもしれません。実は道徳の授業とは、そこから始まるものです。建前やきれいごとずくめでは「上滑りの授業」という批判を免れません。

“テキトー”なことを言っていると、この先生はツツ込んでくる。そのように子どもたちが集団的に自覚する。これは質の高い授業が成立する「隠れた条件」の一つです。学年が上がるにつれて、子ども同士でツツ込み合って、応答のある授業を展開。これをめざしたいものです。

そのためには、ふだんから本音が語れる、開かれた「学級・集団」形成の営みをおろそかにはできません。



人権教育は「2本の柱」から

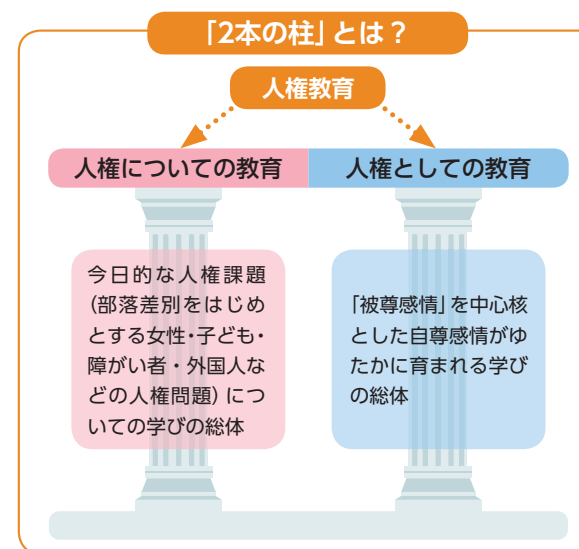
イジワルをされる側のうさぎ・たぬき・きつねたちの悔しい気持ち。そこに思いを寄せる授業も極めて重要です。このおおかみには相手に対する現実想像力が欠けています。何よりも人間倫理の根幹である個人の尊厳、これについての認識がすっかり欠如しているといわねばなりません。おおかみはなぜそうなったのでしょうか。

ここで想起されるのが次の至言です。

自分の人権が尊重された経験のない者は、
他人の人権も尊重しない。（小熊英二）

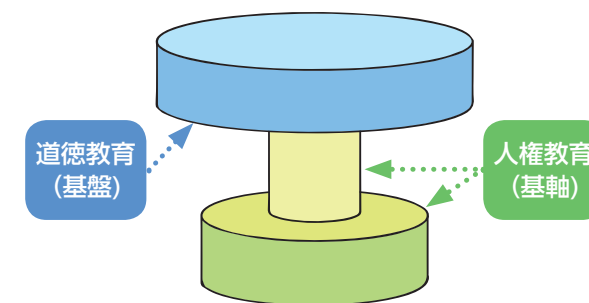
自分が個として人として、かくも大事にされているという実感。これを私は「被尊感情」と称していますが、この感情は自尊感情を形成するための中心核となるものです。おおかみは被尊感情を「くま」との出会いによって初めて感得したと考えることができます。

ここで二つの人権教育についてふれておきたいと思います。一つは「人権についての教育」です。これは今日の人権課題（部落差別をはじめとする女性・子ども・障がい者・外国人などの人権問題）についての学びの総体です。もう一つが「人権としての教育」です。これは先ほど述べた「被尊感情」を中心核とした自尊感情がゆたかに育まれる学びの総体です。この二本柱の相乗的な学びによって「人権尊重の精神の涵養」という人権教育の定義が実体化されていくと考えることができます。



すべての内容項目に「人権の水」を！

道徳教育の目標は「(略) よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」とされています。基盤はブレたり傾いてはなりません。そのためには「基軸」がしっかり備わっていることが肝要です。ブレや傾きが生じると、基盤上でなされる「よりよく生きる」営み自体がぐらつき、いびつなものになってしまいかねません。



基盤を安定させる重要な「基軸」。それは前の章でもふれた普遍的価値とされる「人間の尊厳」、これを真正面に据えて学ぶ人権教育であることに他なりません。

では、人権教育と道徳の授業はどのような関係性でとらえればよいのでしょうか。それは「水と油」としてではなく「水と花」の関係でとらえてはどうでしょうか。子どもの内面に道徳性の「花」がゆたかに咲き続けるには「水」が必要です。水が枯渇すれば、やがて花は枯れてしまいます。

人権教育の充実なくして「道徳性」の花咲かず――。

授業の中、読み物教材の中、教材研究の中、すべての内容項目の中に、つねに「人権の水」を潤沢に。このスタンスを忘れず、授業づくりに打ち込みたいものです。

